

ご縁

河井継之助記念館友の会会員 廣井 晃



会津まつりにて、河井継之助に扮する広井さん

異常気象とは言え、今年のような暑さは、記憶にない。特に、この暑さをより印象付けたのは、会津只見町での暑さを体験したことがある。たまたま「鉄と麦と赤レンガ―河井継之助と外山脩造 志のリレー―」という番組とのご縁で暑さ真っ盛りのロケを体験した。この夏の自然の暑さと触れ合うことが出来た。これは、自分にとつて記憶に残る出来事となった。

高校の時に、司馬遼太郎先生の講演を聴き「峠」を読んだ。日本各地を歩き回った継之助の印象だけが、残っていた。それ以来、地元の内山先生、星さんから、ガトリング砲復元の話をしていただいた。お二人とも、それぞれ、いろんな所でお世話になっていた方であり、この話にはすぐ飛びついた。それまで、ガトリング砲は、ある程度形の決まったものと思っていた。しかし、内山先生から、発明者のリチャード・ジョー



ガトリング砲の最終調整を行う広井さんと星さん

ダン・ガトリングの生い立ちから、発明までの経緯を知り、そして、ガトリング砲の進化までを知ることが出来た。星さんからも沢山の資料や情報をいただいた。図面を書くことでその当時のガトリングと触れ合う感覚も得た。ところが、予算の都合、復元計画は、計画途中で取りやめとなった。そのとき、星さんは、かなり落胆していた。

しばらくして、星さんから明るい電話があった。復元事業の再開であった。内山先生、星さんの打合せを重ね、地元企業の協力のもの「触れることの出来る展示物」が、完成した。お二人と稲川先生の待つ、歯車資料館には、ガトリング砲を道路を引いて納品した。その時の星さんの笑顔が、今も記憶に残っている。

いよいよ、記念館オープンとなった。あつという間に、記念館が開館三周年を迎えることとなった。ガトリング砲の製作に関わった旭精機の中村専務さんから、この機に五分のスケールのガトリング砲を製作する企画が持ち上がった。「動くモデルを作ろう」これは、予算もない。でも、記念館を訪れる方へのお礼の気持ちで製作することになった。この大きさが、継之助の銅像のミニチュアと何故か、釣り合いが取れている。このペアは、東京のビッグサイトまで旅をした。そして、今はバスターミナル地下通路の展示スペースで訪れる人を迎えている。

百四十年を過ぎた今も、見えないうか？自然の流れの中で「ご縁」が生まれる。これが、先人の作つてくれた長岡の遺産なのかもしれない。

この日長岡ではこんな出来事があった。朝から「河井さんのお墓はどこですか？」と絶えず問われた。夕刻、最後の来館者を迎えたとき「今日は河井さんの命日なんですよ」と伝えたら「知らなかった…そうですか、これも何かのご縁。手を合わせて帰ります」といい、私たちが手作りの地図を握り締め、墓所栄涼寺へ歩んでいかれた。来年も沢山の花に囲まれますように。(伊佐)

会報
峠
とうげ

河井継之助記念館
友の会会報
第8号
2010.11

編集・発行
河井継之助記念館
新潟県長岡市長町1丁目1675-1
〒940-0053
Tel.0258-30-1525
Fax.0258-30-1526
頒布価:50円(送料別)

峠抄
とうげしょう ⑦

八月十六日…太陽が肌を刺す異常ともいえる今年の夏。辺りが暗くなると寺々に灯った蠟燭の明りが揺れる。あの日はどんなだったかろう。

河井継之助が郷土長岡の行く末を案じ浄土へ旅立った日。鬱蒼と繁った木々草々、そして大勢の人達の群れる臭い、険しい八十里越え心身ともに現代人の想像を絶する旅、どんなに考え思いあぐねても彼等の苦渋には到底及ばない。そして彼等を受け入れた只見の人々の多大な温情。今尚、只見では命日に継之助の御霊の供養がなされている。闇の中で陽炎の様に立ちのぼり消えゆく香に想いは吸い込まれていった…

『峠』の越後長岡を歩く

6

連載

司馬遼太郎の『峠』に描かれている「越後長岡」の風景を現在に訪ねるシリーズ。今回は、前号で紹介した悠久山に鎮座する蒼柴神社を歩いてみました。

●『峠』下巻 新潮文庫355ページより

東をめぐらしていた。

「悠久山にゆけば河井さまがいらつしやる」

といううわさをきき、そこを目標にした。悠久山というのは森立峠のふもとの丘陵であり、牧野家中興の祖忠辰を祭神とする神社があった。

継之助が日頃可愛がつていた、旅籠軒屋の娘むつ。新政府軍が侵入し、混乱する長岡城下から彼女が目指した悠久山には牧野家ゆかりの社がありました。越後長岡第三代藩主・牧野忠辰を祀った蒼柴大明神の社です。

忠辰を祀った社は、はじめは長岡城内にありました。四代藩主・忠寿が、神道の信仰に篤かった養父忠辰のため建立したものです。後に、明和八（七七）年、忠辰の五十回忌に際して蒼柴大明神の号が贈られると、それを機に九代藩主・忠精が戸左衛門新田御林地内を選び、十年の歳月をかけ社殿を造営しました。そして「帯を悠久山と名付け、天明元（七八）年に城内から遷座しました。それから悠久山御社と

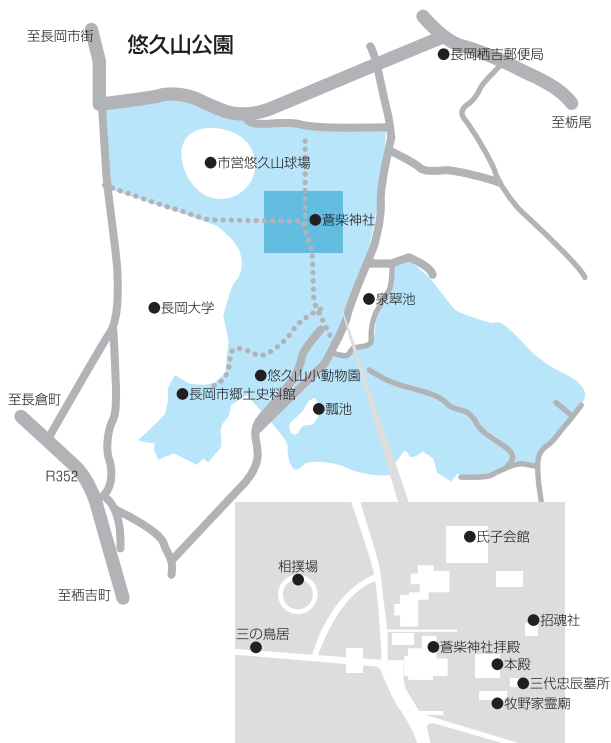
して長岡の民に親しまれ、明治に入つてからは現在のように蒼柴神社と呼ばれるようになります。

戊辰戦争時、新政府軍は牧野家ゆかりの社を焼き払おうと悠久山に迫ってきましたが、三の鳥居に掲げられている、光格天皇の時に拝領した「蒼柴大明神」の勅額を発見し、火をつけることができなかつたという逸話が伝えられています。後の太平洋戦争時の長岡空襲でも焼失を免れ、日光東照宮を模したと言われる荘厳な権現造りの社殿は、江戸時代の面影を今に残しています。

現在、蒼柴神社の周りには招魂社、牧野家霊廟などが存在しています。社殿に向つて右奥にある牧野家霊廟は、元は菩提寺である済海寺（東京都港区三田）にあった墓碑を、蒼柴神社境内地に移したもので、歴代藩主や正室などの墓碑十七基が並んでいます。また、左奥にある招魂社は、戊辰戦争で亡くなった長岡藩士達の霊を祀るために、明治七（一八七四）年に創建されました。毎年長岡落城の五月には、長岡藩士族会の柏友会による招魂祭が、会津からも関係者を招き、しめやかに行われています。（権澤）

参考文献

『蒼柴神社誌』（永井銈次郎編）
『長岡歴史事典』（長岡市）他
取材協力 蒼柴神社



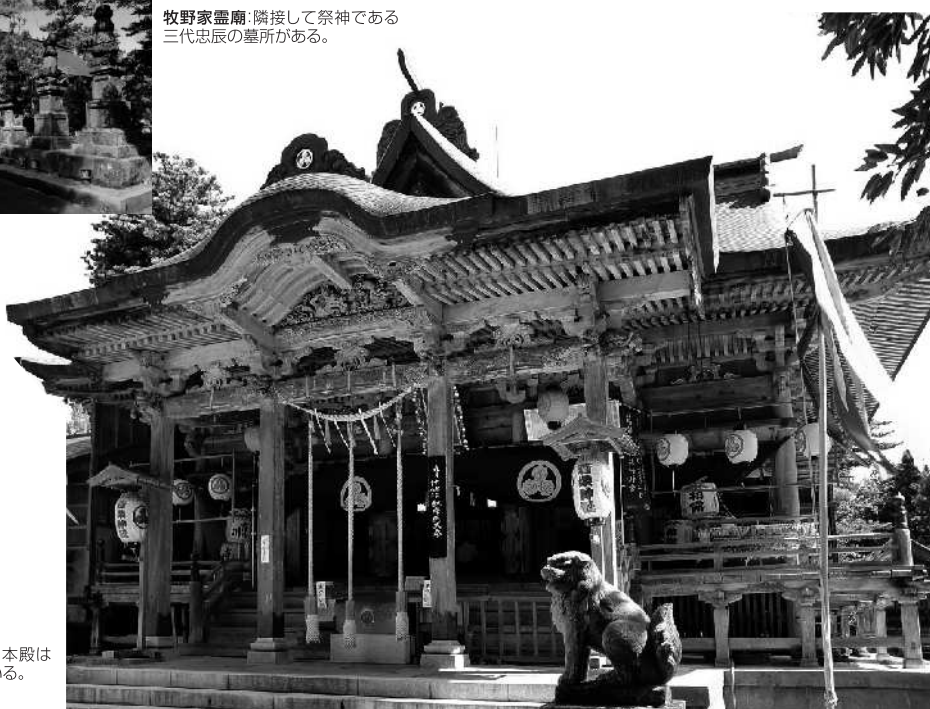
三の鳥居:『峠』にも出てくる「杉木立の参道」の中に立つ。勅額は現在取り外され保管されている。



牧野家霊廟:隣接して祭神である三代忠辰の墓所がある。



招魂社:左側には、河井継之助をはじめ戊辰戦争没者、右側には西南戦争で殉死した旧藩士の碑が並んでいる。



蒼柴神社拝殿:奥にある本殿は現在覆屋で保護されている。

河井継之助の生涯 その二 ● パネル紹介



ある。歌詞も節回しもすこぶる雄壮なものだった。やがて「陣句」は「甚句」と名を改め、農村や町方でも歌われるようになった。そこに踊りが加わって、盆踊りとして使われるようになったという。歌詞も庶民の生活を思うような内容になっていた。

この絵について『長岡市史別編』の「長岡藩時代の年中行事」の七月の項に次のような記述がみられる。

「爾保布は幅の裏に『表五の丁の四つ角、大枡の辺が往時盆の踊場だった。家中の若侍で庶民と二つ環になつて踊るものも少なからず、河井継之助なども編み笠におもて面をかたくして(略)』と書いている」

これは継之助が盆踊りに加わって踊っていたことがわかるひとつの資料である。

料である。
長岡城攻防絵図

中央に信濃川を挟み、両岸で行われている戦の様子が詳細に描かれているものである。絵図の右上余白には「慶応四年辰五月十日榎峠合戦始まり…」の文字も読みとれる。小千谷会談決裂後、約三ヶ月にも及んで攻防戦が繰り返され、た北越戊辰戦争。長岡城下二帯が戦野となり、激しいせめぎあいがあった。あちこちで起こったことが、絵図に描かれている多数の巨大な火柱からわかる。長岡藩の五間梯子の旗や、薩摩藩、長州藩などの旗が対峙しており、長岡藩が加盟した奥羽越列藩同盟軍の陣と新政府軍の陣の緊迫した様子が伝わってくる。

ひとときを引くのが峻険・榎峠。長岡城から南に十二キロメートルの地点にあり、信濃川沿いに切り立つ断崖である。長岡藩の開戦の幕開けとなったその峠は、二〇〇四年の中越地震で崩れ、かつての険しい様相は今ももう見られない。信濃川に架かる越の大橋の西詰には、司馬遼太郎が自身の著書『峠』について、自分の思いを書き綴った文学碑が峠の方を見る格好でたずんでいる。(神保)

「河井継之助記念館」海を越える

書道家・田中玉蘭さん(会報4号参照)揮毫の「河井継之助記念館」が、沖縄県立美術館において行われた「アートアズアート」芸術の祭典 in 沖縄(会期・六月一日〜六日)で展示されました。「河井継之助を色んな地域の方に知ってほしい」という田中先生からの希望により、数ある中からこの作品を選ばれました。「記念館に行ったことがある!」と熱心にご覧になる方もいたという話が主催の株式会社アルファネオの方からあったほど。



遠方からの客人

インタビュー⑥「峠」を読んでファンになって...



横井清さん (54歳)

平成22年9月19日(日)

「つて日本の将来を考えていた。長岡やこの地域だけでなくね...。そこで、どんな所でどんな環境で育ったのか一度見てみたくて長岡に来ました。長岡の印象は？」

「ん〜、実際にみると広くて米どころというイメージがある。もともと藩は冬は厳しいだろうが裕福だったと思う。」

「住まいが大阪なもので、司馬遼太郎記念館には何度も行きました。以前、偶然にもバーで司馬遼太郎に会った時は興奮し大感激しました。」

「笑顔で話し終わると「もう一度館内を見に来ます」と席を立たれました。」

(インタビュー/伊佐・西川)

参考文献

- 『ふるさと長岡のあゆみ』(長岡市)
- 『長岡市史』(長岡市)
- 『長岡藩』(稲川明雄著)



踊りの由来は、先祖を迎え、慰め、送るために踊られたといわれ、祖霊供養の時期であるお盆に実施された。踊りに合わせて歌う歌は「甚句」である。長岡藩には、戦陣で士気を鼓舞するものとして武士たちに歌いつがれた「長岡陣句」が伝わっており、これが「家中節」で

河井継之助はどういう人物？

その⑥ 十七歳

連載

長岡城下にはいくつかの少年グループがあった。その一つの桶宗に継之助は入っている。

大橋佐平の『北越名士伝』に桶宗（そこでは桶組となっている）を次のように紹介している。

君乃ち、三間市之進・花輪馨之進・渡辺進の諸士と約し、桶組と名く。蓋し、箍桶 濁水を漏さざるの義に取ると云ふ。三士古と長岡の三進と称す。皆、卓抜の名あり。初め、此群に入る者三十五名、後百余名に至る。

これによれば河井継之助が三間・花輪・渡辺の三子と桶宗を結成したことになっている。今泉省三著の『三島億二郎傳』などには、小林虎三郎や川島鋭次郎、鶴殿団次郎など、幕末の長岡藩を背負う人材が集ったとあるから、若者の精神の陶冶に一役買った集団教育であったものと思われる。もともと野樸を好み、剛健、しかも勉学にいそしんだものといわれている。『北越名士伝』では河井継之助より、およそ十歳くらい若い者たちが結成に尽力

したことになっている。河井継之助はのちに藩政を担当すると、この桶宗グループから登用し、

改革の中心人材としたり、北越戊辰戦争では軍事掛や各隊長・使番・御金奉行などの要職に就かせていった。

なお、首領であった伊丹政由はその天分を発揮することなく、二十九歳で病没し、名は世になかった。

因みに老中松平定信が寛政異学の禁を發布してから、全国諸藩は幕府に倣い、藩の学問を概ね朱子学に改めている。

長岡藩校は徂徠学・古義学が中心となつたためらしい学問所であったが、それは藩主牧野忠精の英断と、藩の創設期から培ってきた伝統の好学心を継承したものだ。

そこで継之助が何歳のころから陽明学と出会ったかを知る術が今のところない。郷土史家の今泉鐸次郎らは、十七歳のころには陽明学を学んでいたとしている。

長岡の歴史研究者剣持利夫氏は「継之助が幼いころ『王陽明先

生出身靖乱録』を読んで感化をうけた」としている。己れの人生に王陽明を似せようとしたところが面白い。十七歳のときには陽明学を学んで、立志を誓明したという証拠は、二十九歳のときの自作の漢詩にある。

十七天に誓つて輔国に擬す、春秋二十九宿心踏る、千歳此の機得べきこと難し、世味知り来つて長大息、英雄事を為す豈縁無からんや、出処唯応に自然付すべし、古自り天人定数存す、好し酣睡を將つて残年を送らん。

十七歳といえれば元服の翌年である。十五歳のときには古義学を学び、崇徳館の質問生であつたというから、元服を境に継之助の心境の変化があつたにちがいない。

十七歳。天保十四（一八四三）年彼は靖乱録を読んで鶏を割いて陽明を祭り、立志を誓つたというのだ。

継之助はひとたび志を立てると、王陽明のすべてを知ろうとする。しかし、当時の長岡藩には、陽明学を知ろうにも、それほど書籍や指南者がいたわけではなかつた。佐藤一斎の『言志録』など数種の書籍が入手できたに

すぎなかつたであろう。

継之助は生来、悪筆であつたという。そこでまず、王義之の書を作ねることから、陽明学を知ろうとした。伝説によれば、王陽明の先祖に王義之がいる。

継之助の晩年の書を見ると、見事な筆致のものが多し。中太の筆を行書体で書き記す継之助の書は、王義之の書に似ている。王陽明の先祖は王義之だとする伝説を継之助は信じていたという。

十一歳の陽明は、ようやく科挙の最終試験に合格した父のところへ赴うとし、祖父とともに鎮江の金山寺に立ち寄つた。そのとき、陽明が詩を詠んだ。

金山一点 大きき拳の如し
打破す 維揚（揚州）水底の天
酔うて倚る妙高台上の月
王簫吹徹す 洞竜の眠り

「洞竜の眠り」とは、自号の「蒼龍窟」に通ずるものがある。

十七歳の継之助がなぜ、立志を誓つたのかは、陽明学祖王陽明がいう「志立たざれば舵なきの舟、衝なき馬の如し、漂蕩奔逸して、終にまた何の底る所ぞや」に感奮したからにはかならない。己れの志とは何か。「十七天に誓つて輔国に擬す」とあるのは、継之助が十七歳のときに志した目標である。

その目標のためには強い意欲を持たねばならない。そのために継之助は、鶏を犠牲にし天に志を果たそうと誓つたのである。輔国とは何か。当時、国は藩で

ある。長岡藩政を輔けることを生涯の志としたといえる。その実現のために、継之助は戦略を立てる。どうしたら、志を果せるのか。それには己れの行儀を変えねばならぬ。知謀も必要だ。知恵が第一義。己れの生き方、規範も問題にせねばならぬだろう。兵法家にもなる。

王陽明が「天下の己を信ずるを求めざるなり、自ら信ずるのみ、吾方に以て、自ら信ずるを求めて暇あらず、而して、人の己を信ずるを求むに暇あらんや」と説いたというが、継之助は陽明学を学び、経世家を志すようになると、強い自己の確立をめざす。

いわゆる正義への自信である。正しいと思つたことを断固やるうという気概を持つ。それは継之助が揮毫するものにも強くあらわれてきた。例えばのちに大崎彦助に与えたという『言志録』に「我等勝縁によつて相学ぶ。一斎先生曰く、少くして学べば、老いて衰へず。老いて学べば死して朽ちず」を記して与えたことでもよく理解できる。

「塵壺」を読む

6 連載

再び東海道を西へ上る。

今切の渡しで、江戸の焚炭屋に出会い、話を聞くと「熊野から出る炭が最も良い」ということだった。その炭のことを「先に記し置き、又、留め置く」と追記したの

は、何か魂胆があったからである。先に伊豆の炭が江戸に出廻っているとした。もともと武州の青梅あたりの炭が、江戸の市中の燃料を供給していたのだが、江戸の人口が増え、生活が贅沢になっ

てくるとたちまち、底をついた。そこで、炭屋は各地を歩いて、新しい供給地を探していた。その炭屋に出会って「熊野炭」の素晴らしい話を聞いたのである。

熊野にははじめから強い憧れを、持っていた。継之助の知識からいえば、熊野は神の国であった。一方では黄泉の国ともいわれ、再生の地でもあった。つまり、死国をのぞくことよって生を知るの

を「山に添いて襲う」をみた観察眼が、のちの戊辰戦争の際の奇襲戦になった。

地形と敵陣地を偵察し、弱点を探しあてて、そこを一挙に攻め込む戦術が継之助には得意であった。継之助は江戸から望遠鏡を持

参っていた。その望遠鏡は、長さ十二センチ、三段になっていて伸ばすと二十七センチの長さになった。対物レンズは直径三・二センチ、携帯用として岩崎善兵衛が作ったものであろう。旅にあたって継之助が江戸で買い求めて持参していた。

因みに岩橋善兵衛は泉州貝塚の人。家業は魚屋だったが早くから眼鏡の玉を磨いて販売していた。寛政五年に望遠鏡をつくり、寛政八（一七九六）には伊能忠敬のために望遠鏡を製作している。

名古屋城の天守の鯨を眺め、黄金に輝く美しさに感嘆し、鱗の文様を見たと喜んでゐる。櫓の箱棟に付してある葵の七ツ御紋までよくみえたと旅日記に記したが、城を望遠鏡で観察するには、注意が必要だった。「陰かに」とあるところから、周りに人影がないか確認しながらの名古屋城見学だったことがわかる。

名古屋に宿をとり、商家を見学し、夜は夜店を見物した。「小江戸」のようだと評した城下町には伊東・大丸などの木綿織物店が繁昌しているところを観察している。

桑名から津に入り、師の斉藤拙堂のところへ通知を出すと、かつて江戸で同門だった用助という人物が宿に訪ねてきている。この用助という人物の素性がわからない。身分が低いようだが、拙堂

門下では一角の人物であったと思ふのだが、津では最後まで継之助の面倒をみているから、余程の親友だったと思う。

六月二十一日、継之助は伊勢の津藩領に入った。津藩は外様大名の藤堂家三十二万石であった。津には陽明学の先達、斉藤拙堂がいる。

もともと再度の遊学の目的のひとつに、著名な斉藤拙堂に会うことがあった。最初の嘉永五年の遊学のときも、久敬舎の塾長古賀謹一郎に仲介してもらい斉藤拙堂に会った。

しかし、そのときは拙堂の門人となったが、その学問に直接接したかは不明である。再び遊学の途についていた際、江戸

西国遊歴は備中松山の山田方谷のもとに行くことにあったが、

そのまえに津城下に入って拙堂を訪ねることにした。

ところが、津領に入って、思わぬ展開が待っていた。そのきっかけは街道を歩いている、郷士に出会ったことから始まった。郷士は

見ず知らずの継之助に操練（軍事訓練）が嫌だとくどいというのだ。旅日記「塵壺」には欄外に小さく薄墨で「郷士クドク」とあるのが印象的だ。初対面の旅人の継之助に苦情を告白するというのも不思議だが、継之助には他人から信用される仁徳というもの

が備わっていたかもしれない。くどいた郷士は操練、つまり軍事訓練に赴く途中だった。それはあとで知ったのだが、津藩は郷士を集め大壮士隊・小壮士隊という、それぞれ百名の郷士隊を編成した。

兵士の給与は三人扶持。しかし、その三人扶持は新田開発をした分で賄えというのだ。当時封建制が崩壊しつつあり、従来のような刀槍、鎧をまとう武装兵団を編成することがむずかしくなっており、先進的な西国各藩は農兵隊を編成しようとしていた。しかし、農兵を集めてもその財源基盤もままならなかった。

津藩では斉藤拙堂の献策で郷士隊を編成した。郷士たちにとって操練は迷惑な話だ。鉄砲をもつが鉄砲となった。鉄砲は足軽たちが

使うものだった。足軽に委せれば良いのに津藩は郷士隊をつくらせた。

その郷士たちが月に何回かの操練に行く途中、河井継之助らに出会ったというのである。

郷士たちは納税をしない代りに兵役を負担し、その費用は荒地を開拓した新田の収穫で賄えというのだから虫の良い話だった。そのシステムを考案したのが斉藤拙堂だと郷士らは言う。では斉藤拙堂とはどういう人物だったのか。

斉藤拙堂は通称を徳蔵、名は正謙、字を有終といい、津藩士、藩主の藤堂高猷の十二歳の時から侍読として藩政を輔佐した。藩校の督学として文武の学政を統括し、藩政を諮詢したという。また、洋学や兵法砲術にも詳しくあった。拙堂の容貌は、顔面は痘瘡のあとが残り、両耳が高く聳えていたという。面と向って拙堂に会うと、両耳だけが大きく見えた。随分奇妙の容貌であった。

学問は宋儒を本としたが、必ずしも墨守せず、あらゆることにも興味を示し、独歩の称があった。継之助はそういう拙堂に憧れていた。

「いつか友の会の支部を只見に作ってもいいな！そうしたら支部長をやるよ」。友の会がまだ駆け出しの頃、そう言って応援してくれた新国さん。あたたかい会津弁と気さくな笑顔に会いに、秋近づく只見を訪ねた。

時代が人を呼ぶ

只見の自然に学ぶ会代表 新国 勇さん（五十三歳）

当たり前前（ご）に気づいたとき、すべてが始まる

「当たり前前（ご）に気づきさえすれば、地域づくりはできるというのが持論なんだ」。私達は口癖のように「自分の町は何もない」と言ってしまう。「只見には医者がない、働き場がない、若者がいない、子供がいない、雪が多くていられないといつてなげく人がいる。でもブナの森では日本一というすばらしい自然がある！ いつも身近にあるから、その宝に気づかないだけなんだ」。地域づくりの基本は、①気づくこと、

②みがくこと、③共感を得ること、と新国さんは指を折る。「これで大概はうまくいくが、気づくというところがむずかしい。長岡なら河井継之助や米百俵でしょ。うちの宝は手つかずの自然！ これはよそにはないよ」。只見町には約四万ヘクタールもの原生的なブナ林が広がっている。猪苗代湖の四倍もある面積だ。「只見がブナで生きるまちとなったのは、平成十四年にブナ林の伐採反対運動が持ち上がった時がきっかけ。その後、三年かけてブナ

林総合学術調査を行ったら「これ

ほとんどない所だぞ」ということになり、平成十七年に世界ブナ・サミットを開催した。サミットが終わって町民の意識が変わった。それまでのブナは、ナメコの植菌木だったり山菜採り場というだけで鑑賞する対象じゃなかった。気づくことから始まって、調査をしてみがきをかけ、それをマスコミで広げてもらったんだ。

時代が要求した人物

只見町史編さん事業にかかわることがきっかけで長岡との付き合いが始まった。「平成四年に只見町の河井継之助記念館リニューアル計画が持ち上がり長岡へ。そこで初めて戊辰戦争や河井継之助を知るようになった。俺って元々人文系じゃなくて自然史系だから。今年の交流旅行で墓前祭に参加した。主催の塩沢観光協会岩淵さんを支え

つつ、私達の受入れを調整してくれたのも新国さんだった。フットワークが軽く、いつも頼りにしてしまう。そんな新国さんは河井継之助をこ

はどうしようもないことじゃなかったし気がついただけ（笑）。あのよくなタイプはもう今の世には出ないけど、きつとその時代が要求したんだらうね。風雲急を告げるあの時代が呼んだんだよ。長岡では恨み半分、親しみ半分だと思う。どちらかというところ、あれほどまでしなければ……というのが長岡の人の本音なのでは。だけど、明治以降、長岡からはえらい人物が輩出している。その長岡の礎となった人物な

んじゃないかと思う。ただこれはよその人間が言うことであって、地元の人にとっては家族親族を奪われたというくらいとこもあるはず。とかく偉人や英傑といった言葉で評される人物だが、長岡の歴史に負の部分を残したことは否めない。

只見の人が助けてくれた

長岡の人は只見では何もしていないのに、今に至るまでよくしてくれるのはなぜか。「当時は同じ経済圏であり通婚圏だったから『同郷の人』という感覚だったと思う。八十里越での人の行き来は昭和初期からなくなっただけで、江戸、明治、大正期まではここが幹線道路だった。只見の人は三代遡れば越後の人だといわれているくらい親しい仲だったんだよ。現代の人が連想する新潟県の人、福島県の人という関係ではなかったと思うよ」。戊辰戦争

の頃、大勢の避難民が長岡から峠を越えた。只見の人は「長岡の人」というより「同郷の人」という気持ちで受け入れた。「長岡と只見は『同郷』っていうレベルで交流し伝えていたらしい。『河井継之助が通った八十里越』といわれるが、たまたま河井継之助という象徴的な人物が通っただけのこと。只見は養蚕が盛んで昭和初期まで夏になると越後から手間取りといて多くの人が稼ぎに来ていたんだよ。八十里越の木ノ根峠が越後から来る人と会津から行く人の交流地点だったそう

だ。只見では越後の人たちを『堅い（＝まじめでよく稼ぐ）』といって婿や嫁にした。『なぜあの時、只見の人がよく面倒をみてくれたのか』というのは現代人の発想だな。町のためになる仕事はなんでも引き受ける。相手の地位や肩書きに関係なく分け隔てなく付き合い合っていく。町の人から「勇さん」と言われて慕われる所以がそこにある。「今度只見に来たときは、美味しいソースカツ丼（会津B級グルメのつ）食わせてやるからな！」。そう言っ

て見送ってくれた新国さんに、車窓から何度も「ありがとう」と手を振った。

（インタビューと写真：嘉瀬）

新国勇（に）についていさむプロフィール

只見町職員として只見町史等23冊を編集刊行、民員の国重要文化財指定、世界ブナ・サミットの開催、只見町ブナセンターの開設に関わり、平成20年退職。現在、只見の自然に学ぶ会代表として、地域の自然の魅力を開発することで地域づくりを進めている。



友の会研修旅行報告

今年も河井継之助の墓前祭が八月十六日に只見の方々によってしめやかに執り行われました。

今回は、会員でもある長岡市の妙圓寺住職内山慶法さんが墓前で読経し、参列者全員で般若心経を唱和し、継之助や只見の地で亡くなった全ての人の魂を弔いました。また、前田剣豪会の勇壮な剣舞も披露され、その後場所を変えて継之助を語る会が催されました。帰路、目黒竹市さん宅で管理されている長岡藩土石垣龍三郎の墓を参ることができ、只見の地で病氣や様々な理由で亡くなった長岡藩の人々

が多くいる事を知りました。

終焉の地への旅は、戊辰の戦い後永い年月を経て、只見の方々には深い慈愛の心が連綿と受け継がれていることを再確認しました。

(西川)



会員の声

「会員の声」大募集!

●讀!! 慈眼寺さん

慈眼寺 戊辰の昔を今に伝える名刹である。観光寺院でもない、行政の支援もない、寺の経営にも貢献はない...多分?。その寺が、彼の大地震で瀕死の戊辰の歴史を修復され、次代につないでくれた。資料の保存・開示、当時の逸話の伝承、時を問わないビクターへの対応、継之助の温もり残る会員の開放(研修会場)など。まさに、地域に開かれたこの寺は、今日も歴史の重みを心に、凜として建つ。そんな慈眼寺さんに、地元の人として峠の読者とともに「讀」の一字を贈りたいと思うのだが。

— 築田勝一(小千谷市)

●ありがとう。長岡藩

私は会津人です。会津人は今でも長岡藩藩士の方々には脱帽&感謝しております。只見町にも河井様終焉の記念館が御座いますが、司馬さん方の小説ラストと重なり、とても切なくなります。当時は河井様が最終的に選んだ苦渋の選択を、云々言う方々もいた事でしょう。されど長岡を。主君を。とても大切に思った結果ではないのでしょうか?故に140年経た今。答えが出ておりますよね!!河井様こそ真の英雄。真のラスト侍だ!

— 清野こずえ(福島県耶麻郡)

●継之助様のお導き

一昨年初夏以来、友の会河井継之助銅像建立委員会との幾度もの打ち合わせを経て本格的な制作に入り、昨年十月「風雲・蒼龍籠」像の除幕式を迎えることができましたが、制作に追われて友の会入会の思いを抱く余裕が有りませんでした。式の後、ミニチュア像も作らせて頂く運びとなり、制作のさなか漸く友の会の仲間入りをさせて頂くことを決意した次第です。何もかも継之助様に導かれてのことと思っております。

— 銅像制作者 峰村哲也(長岡市)

●史跡探訪入旅「河井継之助の墓」

はじめて長岡を訪れた日、目指すは河井継之助の墓。史跡としての墓には、墓参りより「掘苔」という文字が似合う。「そつたい」という言葉の重さが似合う。苔むして多くの歴史を刻んできた墓。私は、白菊を手に墓と向きあった。が、目にとびこんできたのは何とカトリアの花。苔むした墓に一对の洋蘭。河井とカトリアの手向け花。これは難問。暫く考え込んだが「既成概念にとらわれず探究心が深かった河井には似合うかも」と納得。

— 吉崎こずえ(東京都大田区)

●会津から...歴史初心者です

会津に住みながら深く歴史を知る事が無いまま最近までおりました。戊辰戦争から幕末に興味を持ち始め、その事を身近な方に話すと、是非読んでみて!!と言って薦められたのが「峠」でした。瞬間に河井継之助様のファンになり、又、長岡、小千谷を身近に思えた初めての感動でした。早速只見町、慈眼寺、長岡の記念館

に出向き、もっと深く触れたい!という思いで入会の手続きをさせていただいた次第です。どうぞ宜しくお願いします。

— 佐藤広美(福島県会津坂下町)

“ミニチュアガトリング砲”受注生産します

記念館展示室にある『ミニチュアガトリング砲』をご希望の方に受注生産いたします。展示後、欲しいという問合せが、時々ございました。量産できないので、一つ一つの手造りになりますが、ご希望の方に製作いたします。価格は、ケース込で15万円になります。ご連絡をお待ちいたします。



●連絡先:
(株) 広井工機 電話0258-33-1194

「会員の声」大募集!
原稿は二百字以内(題名、氏名は字数外)、事務局までお送りください。投稿を心よりお待ちしております。

(11/30まで)

まちなか偉人館めぐりスタンプラリー

☆入館料割引!!
2010.7.24

☆まちなか観光プラザのおみやげ10%OFF!!

☆スタンプを景品集め!!

●司馬遼太郎著『峠』を読む会
毎月第3月曜日 午後6時30分~8時

●河井継之助旅日記『塵壺』を読み解く会
毎週土曜日 午後1時~3時

●今泉鐸次郎著『河井継之助傳』を読む会
第2・4月曜日 午後1時~3時

●楽しい詩吟教室: 第1・3月曜日 午前10時~11時30分
詳細は記念館へお問い合わせください。

お知らせ

●まちなか偉人館めぐりスタンプラリー開催中

河井継之助記念館、山本五十六記念館、如蔵博物館、駒形十吉記念美術館の4館で実施。2館目以降の入館料割引。その他特典あり。

●講演会報告

四月二十四日友の会総会、講演会、懇親会が開催された。講演会は約二〇〇名が聴講し、只見町文化財調査委員であり只見町の河井継之助記念館展示運営委員でもある飯塚恒夫さんが「八十里越と只見代官丹羽族」と題して講演した。戊辰戦争時長岡藩士とその家族が八十里越から只見に入った時のことや只見代官丹羽族が食糧対策のため奔走したことを資料やスライドを使い説明した。

長岡藩士とその家族の峠越えを救助し、受入れてくれた只見地方の人々。一週間程に二万五千余の人が当時二九二軒の寒村に避難しその混乱ぶりは計り知れなかった。資料には櫛戸村三十戸に五百八人が泊まると記され、また入用米は一日三斗入百俵を必要としたとある。この食糧調達に会津藩野尻代官丹羽族が兵糧総督を兼ね任に当たった。悪天候のため城下からの物資の運送が滞り、たちまち食糧危機に陥った。丹羽代官は自ら東奔西走し力を尽くしたが、寒村での食糧調達には限界があり万策尽き兵糧総督の役目が果たせなかつた責任をとり遺書を残し自害した。只見村をはじめ近村の人々は丹羽族の「義」の精神に心う



飯塚恒夫さんによる講演風景

たれ、わずかな蓄えも提供し危機を脱した。このように避難民は丹羽族の尊い命と引き換えに只見の人々から大きな恩義を受けた。その後、西軍が八十里越より進攻し戦いは熾烈を極めていった。

飯塚先生の穏やかながら熱を込めた話に「それ程までに大変だったとは」と場内からは驚きの声があがり、只見の人の深い慈しみに感謝し会場を後にした。険しい峠道は時代に飲み込まれ今は草に覆われているが、長岡と只見の絆を大切に受け継いでいきたいと心新たに思う日だった。

(伊佐)

河井継之助記念館 友の会について

会員の交流や情報交換を通して継之助について親しみ、学び、記念館を応援する会です。

●会員数／正会員：518名／協賛会員：62名 (9/25現在)

会員募集中

●特典／①友の会会報「峠」配付
②会員との交流 ③催事案内・参加 ④研修旅行への案内・参加

●入会手続き
①申込書に会費を添えて、事務局へ持参。
②申込書を事務局へ送り(郵送、FAX)、会費は銀行振込または郵便振込で納入。(手数料は本人負担となります)

●年会費 ※会計年度は3月31日まで
①正会員(ア)小・中学生:500円 (イ)高校生以上:2000円
②協賛会員／一口5000円(法人の他、個人でも可)

●口座について
・加入者名／河井継之助記念館友の会
・口座番号／郵便局 00560-9-96432
長岡信用金庫関東町支店 普1032829
北越銀行本店 普1764663
大光銀行本店 普3011256
第四銀行長岡営業部 普1560562

※郵便局の場合は手数料無料の払込用紙が事務局にありますのでご利用ください。

新入会員ご紹介

(平成22年4月1日～9月25日現在)

朝倉 久雄	東京都世田谷区	佐野 宣夫	新潟県長岡市	野村 一敏	新潟県長岡市
安藤 節子	東京都台東区	城後 光	東京都葛飾区	長谷川雄輔	新潟県新潟市
猪俣 一男	新潟県長岡市	白濱 守	新潟県長岡市	長谷部浩司	福島県南会津郡
岩上 尚登	岩手県盛岡市	新保 順之	新潟県長岡市	島山 真一	新潟県長岡市
大浦方 健	新潟県長岡市	菅原由美子	千葉県船橋市	原田 和男	新潟県長岡市
大崎 勉	新潟県長岡市	杉本 正雄	新潟県長岡市	早川 一男	新潟県新潟市
片野 卓	新潟県新潟市	鈴木 博視	福島県大沼郡	広川 潔	新潟県長岡市
川村 恒宏	北海道江別市	鈴木 哲	新潟県新潟市	前田 敏郎	神奈川県横浜須賀野
城所 幸則	愛知県豊川市	須藤 伸次	群馬県伊勢崎市	村上 武継	神奈川県川崎市
葛綿 昇三	新潟県長岡市	田中 尚子	東京都北区	森 清隆	東京都杉並区
葛綿 幸子	新潟県長岡市	谷口 浩人	新潟県長岡市	山崎由美子	東京都葛飾区
工藤 新一	長崎県長崎市	中田 秀一	長野県須坂市	山田 征男	福島県大沼郡
粉川美智子	新潟県長岡市	中嶋 民男	福島県大沼郡	横山平八郎	新潟県長岡市
小林源四郎	新潟県長岡市	永田 俊基	新潟県長岡市	渡辺 悟	新潟県長岡市
齋藤 和夫	新潟県長岡市	中村 健治	新潟県長岡市	渡部 秀樹	福島県河沼郡
坂牧 兵衛	新潟県長岡市	根本 昌志	福島県大沼郡	以上49名(アイウエオ順・敬称略)	
佐藤 泰輔	新潟県長岡市	根本 守男	福島県大沼郡		

●友の会事務局／河井継之助記念館

友の会ホームページアドレス <http://tsuginosuke.net/>

編集後記

●戊辰戦争時に継之助に最後まで同行していた人の中に外山脩造(寅太)がいます。松蔵は知っているでも寅太？と思われる方が多いのではないのでしょうか。脩造は、長岡市小貫(旧栃尾市)の庄屋に生まれ、十代後半に継之助と出会います。考え方や行動に大きな影響を受け、継之助を人生の師と仰ぎました。死の床に伏した継之助は「寅や、何でもこれからのことは商人が早道だ。思い切つて商人になりやい」と脩造に言い残します。その後、慶應義塾で学び大蔵省を経て関西の財界で活躍しました。継之助と同じように早くから世界に目をむけ、維新後の激動期を駆け抜けた人です。近頃地元で話題になつており、これから益々注目されていく人物だと思います。

(西川)



寅太への言葉が紹介されているパネル

編集人・稲川明雄 嘉瀬宏美 榎澤幸子
構成・月刊マイスキップ編集部
伊佐春美 神保智子 西川里美
印刷・高遠印刷株式会社